

からだでおしゃべり 身体表現の世界

無意識的な身体表現と

意識的な身体表現

私の勤務校が短期大学から四年制大学に移行し、卒業研究ゼミという形態の中で学生と付き合うようになってから、今年で四年目。先日、三期生と一期生が集まりました。新卒の三期生は、理想と現実という葛藤の中で、未だに緊張をはらんだピリピリ感を漂わせたつとも笑顔が輝いています。一方で三年目に突入した

坪倉紀代子

一期生の、どこかにいら立ちとあきらめを隠しもつ笑顔に胸を衝かれました。

私は今、保育者養成校で「身体表現」にかかわる単元を通して、学生たちに毎日接しています。そこでは、この「身体表現」という活動を、〈伝えたい感動やイメージを、身体を素材に、その運動を媒体とした表現活動〉と定義してカリキュラムを構築しています。これを子どもたちの活動に置き換えると、〈何らかの刺激を受け心が動いたとき、その心が感じている



ことを、身体およびその運動で表している状態」といえましょう。この身体表現には《無意識な身体表現》と《意識的な身体表現》という二つの側面があると思えます。

《無意識な身体表現》とは、《感じていることが、からだの表情や動作、動き方にいや応なく現れてしまっている状態》です。子どもたちの心のうち、感情は、そのからだの表情や動作、姿勢、振る舞い方をよく観察してみればおのずと見えてくるものです。「目は口ほどにものを言い」と言われますが、「からだは言葉ほどにものを言い」ということ、つまり、「からだがおしゃべりをしている。からだはおしゃべりができる！」ということになるでしょう。

一方、《意識的な身体表現》の代表としては、舞踊をめぐるさまざまなジャンルの表現形式があげられますが、これを子どもの世界で考えると、《全身を関与させた運動を伴うごっこ遊び》つまり、なりきる活動

＝動的でダイナミックな場面を有している変身ごっこなどがあげられます。この運動によるカタルシスと、心の解放を伴う身体表現の世界は、発表や評価を意識した活動の中でよりも、日常の保育の中で、傍らにいる担任こそがかかわり、見届けていけるはずの世界だと思います。週一回、限られた時間での子どもの姿しか知らない外部体操講師などにより与えられる題材の、画一的な指導による動きの世界ではなく、子ども自身が選んだ題材を子ども自身が工夫する動きの世界では、実に多様な運動が展開されています。

からだをあそび、 からだであそぶ

平成十八年度卒業研究において、クラス全員で身体表現の活動をするためにはどのような題材がふさわしいのかを探るために、自由遊びの中で見られる身体表現の事例を、四歳児を対象に集めた資料があります。^注

その全六十三例を分析した結果、次の三つに大別されました。

① 動くこと自体を楽しむ。動きのバリエーションを工夫し、動きへのチャレンジを楽しむ。

(三十五例／六十三例中 約五十六%)

② 何らかのイメージをしつかりもって動く。

(二十六例／六十三例中 約四十一%)

③ その他(二例／六十三例中 約三%)

①は、たとえば

1. たまたま誰かがケンケンをしている
2. すぐ傍らにいる子どもも始める
3. どちらが回数を多く続けられるか競う
4. 左右二回ずつ交互ケンケンをする
5. ケンケンしながら移動する

という具合で、そのほかにも跳ぶ、回る、逃げる、走るなど、運動そのものによる感覚を確認し、楽しんでいくような状態で、最も多く見られました。

②は、ウサギ、カエル、イノシシなどの、動物や虫(十四種類)、ヒーロー(テレビのキャラクター)、おぼけ、バスの運転手などの特徴を、動きでとらえ変身してそのものになりきってあそんでいる状態が次に続きます。

③は、たまたま聞こえてきた音楽に合わせてからだを動かしている例と、座布団を利用してあそんでいた二例でした。

これらの事例の詳細を見ていくと、①からは、子どもたちは動くことが大好きで、からだが感じるさまざまなことを楽しんでいることがよくわかります。動くこと、動きそのものを楽しみ、自らがあそびの中でその運動を発展させていく能力をもっていることもわかります。さらにその活動を受容し、見守り、見届ける大人が傍らにいれば、活動はさらに意欲的に継続・発展・展開されていくことが見てとれます。

また、②のイメージをもつて動くという活動からは、一つの題材から多様な動きが引き出されていること、

また、最初に明確なイメージがあつてそれに基づいて動きを考えていくというよりは、動いているうちに、動いたことにより、イメージが生まれるという特徴が見られます。

①の事例に見られるように、からだを感じていることがまず土台にあつて、その感覚に驚きをもったり、おもしろがる体験をたくさんすること―これを私は、《からだをあそぶ》というふうにとらえています。この《からだをあそぶ》ことを土台に、②の事例のようにイメージなり、感情、興味あるものを全身を関与させた動きで表現していくこと―これを私は、《からだをあそぶ》ととらえています。身体表現とは、この《からだをあそび、からだであそぶ》ことにほかなりません。

保育者の身体を育てる

この多様な運動を伴い、心も大きく動かしながらの

表現の世界は、先にも述べましたが、子どもの一番身近にいて、日々このころの揺らぎ、からだの驚きをキャッチし得る担任だからこそ展開していける世界だといえるでしょう。この保育者には、子どものからだの今―をキャッチする鋭敏な感性と、動きに結びつく部分を拾いあげる柔軟な発想が求められます。さらに、この表現の世界を構成する環境の最大要因は、保育者自身の身体そのものです。保育者自身の身体のさまざまな能力の開発が求められます。といつても特別な運動能力・技術ではありません。大人になることで忘れていた、あるいは抑え込んでいたと思われる、自身の身体が感じていることに耳を澄ましおもしろがること、素直に感じるままに身体を動かすことを、子どもと一緒に楽しめばいいのです。

『からだがいいな』（童心社 一九九七年）という絵本の中で、作者の山本直英氏がおかあさん、おとうさん方へと題したあとがきの部分で次のように述べら

れています。

身体は心よりも正直ものですから、快・不快の受容器と発信器になって、快適に生きていくための指針になるのです。こうして、私たちの身体を見つめてみますと、「こころ」と同じように「からだ」の存在感を育む子育てが大切になります。

… 中略 …

身体の学習の要点は次のようなことです。

- ・ からだの個人差を認めること。
- ・ からだの快感を肯定すること。
- ・ からだのプライバシーを尊重すること。
- ・ からだの自然体で生きること。
- ・ 自分のからだの主人公になること。

どうぞあなたもお子さんも、もっともつと自分の身体を見つめて、身体が不当に管理され抑制されていないかを確かめてください。

たったひとりの子どもの身体にも、時代の情勢は反映しているはずだからです。

(山本直英・片山健さく 三十七頁)

折に触れこの絵本を眺め、このあとがきを読み返しています。この絵本を見てみると、「そうだね、からだって不思議、からだっておもしろい、からだを動かすことって気持ちがいいよね、からだでなんでもできちゃうんだよね」、そんな感覚を思い出させてくれます。学生と共に私も、授業の中でこれらの感覚を思い起こし、揺り動かし、思い切り楽しまなければと思います。「初めに身体の表現ありき」といわれるように、身体表現とは誰でもが生まれながらにもっている生命的な機能ともいえるものです。成人においても感情表現における言葉の役割は三割で、残りの七割は顔の表情や身体表現などの非言語であるといわれています。言葉によるコミュニケーションが充分でない子どものから

だは、さらに大きな割合で、さまざまな情報を発信しています。からだへの視点をもった保育者を育てたい。からだという側面から、またそのからだがかかわっている運動という側面から、子どもの観察、洞察を試み、保育を考えていける保育者を育てたいと思います。

レイチェル・カーソンの『センス・オブ・ワンダー』（新潮社一九九六年）に、次のような一節があります。

生まれつきそなわっている子どもの「センス・オブ・ワンダー」をいつも新鮮にたもちつづけるためには、わたしたちが住んでいる世界のようなこび、感激、神秘などを子どもといっしょに再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が、すくなくともひとり、そばに
いる必要があります。(二十三〜二十四頁)

「行事が多すぎる。行事のために毎日があるみたい……」「学生のと看のほうで保育を考えていたよね。今は、保育のことなんて考える暇がない……」「あれしちゃあいけません、これしちゃあいけませんって、そればかり……」「もつとじつくり、やりたいだけやらせてあげたいのに……」等々、卒学生のおぶやきです。果立っていったゼミ生たちが、これから保育者としてどのような軌跡をたどっていくのか、何の手助けもできそうにありません。ただただ、心配しつつ一人ひとりを見つめ、その行方を見届けていこうと思つています。

(十文字学園女子大学児童幼児教育学科幼児教育専攻
身体表現指導法、身体表現論・演習担当)

註
櫻場幸絵「保育における身体表現活動の一考察」

「跳ぶ／跳ねるを題材にして」

十文字学園女子大学平成十八年度卒業研究二〇〇六